

# 月刊ウィーン

## GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で  
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊 25 年目

創刊 1989 年 Nr. 292

# 2013年10月号



Gustav Klimt (1862-1918)  
Tod und Leben, 1910/11,  
überarbeitet 1915/16  
Öl auf Leinwand, 180,8 × 200,6 cm  
Leopold Museum, Wien, Inv. 630  
© Leopold Museum, Wien / M. Thunberger



# 杉本純の原子力の話 II

## ウイーンと京都 25



二〇一〇年の東京五輪開催が決定し、国全体が大きな喜びに包まれたのは記憶に新しい。I・O・C総会のプレゼンでは、安倍首相が福島原発での汚染水対策について責任を持つと表明したことが効果的だったと言われている。そこで今回はこの汚染水問題について現時点での情報に基づき説明したい。福島原発事故の一応の収束後も、タービン建屋などにたまる汚染水や一日約四百トン流入する地下水対策を進めていたが、八月十九日に汚染水貯留タンクからの漏えいが発見され、約三百トンの汚染水が漏えいしたと見積もられた。その後詳細な汚染状況の調査が行われ、汚染水が海へ一部流出したものの、二つの防波堤で囲まれた〇三平方キロの外側では放射性核種の濃度が検出限界以下かそれに近い値であることが確認された。



ニタリングの強化、水位集中管理システムの導入、溶接型タンクの増設などの対策が取られている。この漏えいを契機として、東京電力任せにせず、関係閣僚等会議を設置して国が全面に出て必要な対策を実施することとし、国内外の知見の積極的な導入を始め、汚染水処理や地下水対策を含めた中期的な抜本対策として、処理効率の高い高濃度汚染水浄化処理設備の設置、建屋山側の地下水くみ上げ、凍土方式による陸側遮水壁の構築、海側遮水壁の設置などの取り組みを進めることとしている。

さて、今月のウイーンと京都の対比では、両市の観光船について述べてみたい。ウイーンにはドナウ運河やドナウ川を巡航する遊覧船が各種ある。ウイーン市内観光の遊覧船はシュヴェーデン広場とライヒス橋の船着場間を行き来している。その他に同広場から発着するドナウ運河を巡る周遊船がある。また、高速船による隣国スロバキアのプラティスラバ行がここから毎日就航している。ライヒス橋からはハンガリーのブダペスト行が週に二往復している。ここからはバッハウ渓谷のドルンシュタインに至る遊覧船が毎日曜日に運航している。バッハウ渓谷では、修道院で有名なメルクからデュルンシュタインを経てクレムスに至る遊覧船が毎日運航している。

一方、京都の保津川下りは、平安京造営前に下流の京都・大阪に物資を輸送することにはじまり、その後の大坂築城、伏見城造営と筏によって丹波から木材が輸送された。慶長年間からは米・麦・薪炭なども輸送され、昭和三年頃まで運ばれていたが、山陰線の開通（明治三三

ドナウ川と遊覧船



年）と戦後のトラック輸送の発達により、水運利用は次第に姿を消していった。ところが保津川峡谷の自然美は四季を通じてすばらしく、変化に富んだ景観は人の目をとらえて離さない。そこで明治二八年頃から観光客を乗せた川下りがはじまった。亀岡から嵯峨まで一六キロに及ぶ保津川下りは世界的に有名な舟下りとして知られ、年間約三〇万の観光客が訪れている。

余談であるが、筆者はウイーン赴任中遊覧船に乗る機会はなく、保津川下りもこれまで機会はなかった。どちらも地元の人にはあまり乗らないようであるが、七月の休日に家内と保津川下りに乗ろうとJR亀岡駅から船着場に向けて歩き出した。するとタクシィが追いかけて来て昨日の雨による増水で今日は中止と教えてくれた。その代わり、保津川下りをほぼ併走する嵯峨野トロッコ列車に亀岡から嵐山まで乗った。列車からは力ヌーによる川下りを何隻か見ることができ、保津川下りの様子を想像することが出来た。この幸運に感謝しつつ、ドナウ川と遊覧船を描いたスケッチを掲載させていたたく

■ 杉本純 京都大学教授  
元原子力機構ウイーン事務所長 ■